

㊥ 身近な自然を楽しむ: 晩秋から立冬の頃に咲く花と実

Enjoy the surrounding nature: Flowers and nuts found from late fall to early winter

11/16/2023 吉野輝雄

11月に入り、立冬(11/8)が過ぎたので衣替えをしたのに、25°C以上の気温の日が度々ある。しかし、自然は確実に晩秋の装いに変わりつつあり、木々は冬を迎える備えをしている。

芦花公園では、11/4にサザンカ(山茶花)、チャノキ(茶の木)の花を目にした。山茶花は椿と同じツバキ科(*camellia*)の植物で、多様な色、形の花が知られている。白花山茶花は一見椿のようだが、椿は年明け頃から咲き始めるのがほとんどだ。

ホトトギス(杜鵑)は、晩秋に花を咲かせる植物の一つ。花卉の斑点が鳥のホトトギスの胸の模様似ていることから名づけられた。キク(菊)は、菊まつりの時期11月の花だが、今回はコギク(小菊)に注目した。派手な大輪の菊とは違った味がある。ヒャクニチソウ(百日草)とセンニチコウ(千日紅または草)は、その名の通り長期間咲き続けるので、多くの家の庭に植えられていた記憶がある。

多くの植物にとっての秋は、花を咲かせた後に受粉し、実を結ぶ時である。実の中には次世代に命をつなぐ遺伝子(DNA)と栄養素が蓄えられている。熟した実の中の栄養素は糖類、酸味成分などだが、それらは人間や野生動物にとっても栄養となる(中には毒成分や苦み・渋味成分が含まれていて食されるのを防いでいる)。人間は経験によって完熟時期を知り、可食か、美味しいかを見分け、毒・苦み成分を適切に処理して食している。

多種多様な果実を味わうことができる秋は幸せな季節だが、ここでは先ず(A)珍しい木の実を採り上げ、次に(B)可食か否かについて考えることにしよう。

(A): イチゴノキ(苺の木)、ヤマボウシ(山法師)、マキノキ(榎の木)、ムクロジ(無患子)。苺の木は白い壺形の花と苺を想わせる実が同時期なのが特徴。私は、11月半ばに初めて出遭った。実は食べられるが薄味だと言う。味は山法師も同じだが、開花は5月前。榎の木の実は赤と薄緑の2連球形が特徴。赤い実は薄甘味で可食だが、緑の実は有毒なので要注意。

ムクロジ(無患子)には、実の表皮と真っ黒な球形の実それぞれに“物語”がある。表皮は、砕いて水の中で振ると石けんのよう泡が立つ。実は、石けんの語源(シャボン)であるサポニン(シャポニン)を含んでいるからだ。無患子の名は「サポニン液で手を洗ってから食事をする子どもは無病気(無患)」に由来する。一方、堅い黒い実は、羽子つき用の羽の玉に使われていた。

(B): たわわになった柿の木は甘柿か渋柿か? 収穫されていないので渋柿かもしれない。渋柿でも、皮を剥き天日干しすると甘くなる(近所の農家から戴いて試した)。マメガキ(豆柿)は生け花用だが、味味したところ強烈な渋さであった。完熟後は渋さが和らいだが幾分か残っていた。

キカラスウリ(黄烏瓜)に近隣で初めて出遭った。卵形の実が大きく、割った実の中は良く見るカラスウリと全く違っていた。葉の形も特有で、表面がザラついている。

フウセンカズラ(風船蔓)は、小さな天然の提灯のようで可愛い。枯れると皮が薄茶色になり、頭の形の実が中に残る。白い顔の部分に目鼻口を描くと人形になるので、ミニひな人形を作ることができる。